



第2回佳作賞 『りんご料理100選』

学校法人弘前城東学園 弘前医療福祉大学

名誉理事長 下田敦子氏からのメッセージ

「ブックインとっとり 地方出版文化功労賞」制定30周年誠にありがとうございます。  
顧みますと、りんごの消費拡大を願って『りんご料理100選』を自費出版してからあつという間の30年で  
した。

出版当初はりんごを料理に使うことに驚かれましたが、今では農畜水産物は生産だけにとどまらず、加  
工流通販売と総合的に展開され地域の活性化につながっています。

同様に書籍や出版を取り巻く環境も大いなる変貌を遂げ、電子書籍やオンライン書店は、もはや生活の  
一部となっています。

グローバルな時代にあっては、ローカルな視点やそれぞれの地域に根差したものが力を発揮すると  
考えます。地方の出版に光をあて続けたことで、時代の激しい変化の中にあっても輝かしい歴史を築いて  
こられたものと思います。

その力が海外へも波及していることは大変喜ばしく、皆様のご熱意に心から敬意を表します。

今後も更なる進化と発展を続けられますことを祈念申し上げます。



第3回功労賞 『ブナが危ない』

無明舎出版 安倍甲氏からのメッセージ

「ブックインとっとり」創設30周年おめでとうございます。

私どもが地方出版文化功労賞をいただいたのは1990年の第3回のことでした。今もこの四半世紀前の出来  
事はくっきりと脳裡にとどめています。この年は小舎が創立18年目にして初めて黒字決算に転化した年だ  
ったからです。併せて功労賞をいただいた本が、個人の著作でなく「無明舎出版編」という私どもが編ん  
だ本ということも、印象に残っている理由のようです。

私どもは今年で創立45年になります。長ければいいというものではありませんが、秋田で出版をはじめ  
て、先輩である津軽書房の高橋彰一さんや葦書房の久本三多さんらの教えを受けるなか、「自分には彼ら  
のような才能がない。長く続けて追いつくしかない」と悟りました。その先輩たちも物故され、私もあと  
何年この仕事を続けられるのかわかりません。でも、もう一度、この地方出版功労賞をいただけるような  
仕事をして、身を引きたいものだと思っています。



## 第6回次席 『手仕事の匠たち』

### 清野文男氏夫人 岩永鈴代氏からのメッセージ

この度は、ブックインとっとり創設30周年おめでとうございます。

写真家だった主人が、カメラを担いで旅立ってから10年になります。

生前、「職人の仕事を写真と文章で残さなければ！」と、どこにでも出かけて食欲に取材を続けて記録を残していました。その中の1冊「手仕事の匠たち」を第6回で選んでいただきました。とても喜んで鳥取へ飛んで行きました事は、ほんの昨日の事のようにです。

文男はよくこう申しておりました、「俺が死んでも本は残る」と。

そして、思わぬ方向に「本」が独り歩きを始める事もあります。おもしろいですね。

最近は何でも電子版になりつつありますが、「本」という紙の文化もこんな時だからこそ必要ではないかと思えます。

これからも益々本の出版文化が栄えますようにお祈りいたします。



## 第8回次席 『ある日突然犯人に』

### 薦田伸夫氏からのメッセージ

「嘘つきと恥知らずでないとなれない職業は何か」と聞くと、皆様は何とお答えになるでしょうか。「世襲の方が有利」とヒントを出すと、間違える人はいないのではないのでしょうか。

アメリカの占領に目を瞑り、戦争責任を曖昧にしたまま、「経済発展」にうつつを抜かして72年も経つうちに、我が国は、とんでもない国になってしまいました。

そんな国で福島第一原発の事故が起き、ドイツ、スイス、イタリア、台湾、韓国が次々と脱原発に方針転換したのに、事故を起こした当事国である我が国が再稼働に邁進しています。

私は、弁護士の仕事から畑仕事にシフトしようとしていましたが、伊方原発の運転を止めるための本訴や仮処分忙殺されるようになってしまいました。

ブックインと通りの次のアニバーサリーには、良い報告が出来るよう、全力を尽くしたいと思っています。

ブックインと通りの益々のご発展と、皆様方のご健勝をお祈りしています。



## 第9回次席 『霧の湯布院から』

### 高見乾司氏からのメッセージ

#### 「ブックインとっとり30年に寄せて」

「本の国体・ブックインとっとり」において、拙著『霧の湯布院から』（海鳥社／1995）が地方出版文化功労賞（次席）を頂いてから、はやくも20年という年月が過ぎ去っている。この間、私は大分県湯布院町るようにもみえる。

湯布院を離れた私は、宮崎の地で「神楽」を伝える村へ通い続け、「神楽と仮面」をテーマとした研究は進んだ。「限界集落」と呼ばれる過疎地の村で若者たちと語り、地域再生をテーマとしたエコミュージアム計画に参加し、古民家を改装したミュージアムの設立なども手がけた。時代は「自然と協調する文化」「ゆるやかな経済効率と地域再生」へと転換点を示しているようだ。

来春を目標に「湯布院空想の森美術館」の再開が検討されている。当時の仲間たちが、「もう一度、湯布院へ帰っておいで」と、舞台を整えてくれたのである。天の意思とでも表現したいようなこの得がたい機会は、私に何を与えようとしているのか。私が、湯布院という町で出来ることは何なのか。

まず一歩を踏み出し、自分自身に問いかけながら歩き続けることとしよう。



## 第12回特別賞 『子どもたちの朝鮮戦争』を含む『コリア児童文学』

株式会社きたやま南山 代表取締役

### 楠本貞愛氏からのメッセージ

#### 「魂のこもった私の1冊」

末娘の誕生と同時に世に出した児童書が、栄えある特別賞を頂いたのは1999年、20世紀のことでした。その頃の私は、出版の仕事から離れて派遣社員として働いておりました。

出版というリスクな仕事には、二度と手を染めるまいと思っていたのですが、2012年に、私はまた出版にとり憑かれていました。

3・11の東日本大震災を機に、思いがあふれて止まらなくなった94歳の女性の依頼を受け、彼女の人生を、小説仕立てのフィクションとして出版したのです。

それがこの本「百歳物語～絶望の大地に咲く花～」です。親なしで育った依頼者の過酷な人生を、児童養護施設で働く孫娘に話してもらい記録したものです。

依頼者が3・11を機に蘇らせた満州の記憶をもとに、畑裕子さんが豊かな肉付けをしてくださり、美しいherstoryを1冊の本に残すことができました。

その後、依頼者も畑裕子さんも天に召されましたが、私は、生き残った者の責任を噛みしめながら、老いという未知の世界を歩み始めています。



シンセタリオン  
第14回特別賞 『百万人の身世打鈴-朝鮮強制連行・強制労働の恨(ハン)』

映画監督 前田憲二氏からのメッセージ

### 「地方出版文化の躍進を祈念」

鳥取県は日本一小さい県だが、鳥取砂丘や大山は日本一というイメージが強い。少々調べてみると温泉、児童福祉施設などは日本を代表し、医師数が最も多い県である。

聞くとところによれば、今井書店は平安期から千年続く書店で、米子に代表される鳥取県は、いかに高い文化が古代より <sup>つちか</sup> 培われてきたかがわかる。

私が代表となり、5人の編集委員で、7年かけ、日本全国だけでなく、韓国へも数回取材に飛び、やっと1997年12月に完成した本が、『百万人の身世打鈴』（東方出版）である。この書は2,500部出版。テーマは朝鮮人強制連行・強制労働に視点を定め、太平洋戦争の惨さと、反戦を訴求した。その内実が、ブックインとっとり実行委員会に認められ、第14回特別賞を受け、私と編集者が受賞式に出席した。

しかし残念乍ら今回はブックインとつとりに出席できない。その理由は、反戦をテーマにした「東学農民革命」（2時間）という記録映画が昨年完成。各地で上映会があるためだ。

栄枯盛衰がまざまざと桃顔できる米子。

その場で「本の出版文化展」が末永く健勝されんことを、ここに祈念したい。



第15回功労賞『感化院の記憶』 鈴木明子

鈴木明子氏からのメッセージ

### 「出版から十七年を経て」

感化院長の娘として園生と共に育った小澤梅子先生。そのお話を綴った『感化院の記憶』を出版してから17年が経ちました。亡くなるまで子どもたちを育てることに情熱を注がれた先生のようにはいきませんが、桂書房での編集の仕事から遠ざかった私は今、子どもたちに絵本の読み聞かせや、昔話の語り部のボランティアをしています。言語に関わることをしたい、というあのころからの気持ちが持続しているのかもしれない。

推敲が重ねられたテキストから一旦正確に覚えて語る、というのが、記憶力に自信のない私にはプレッシャーになっています。関わり始めたのは古希を迎えようという年齢になってからで、短い話でも話しているうちにふっと記憶が飛んでしまうのではないかと不安です。

今、取り組んでいるのは、トリニダード・トバゴの話。ライオンに食べられそうになるヤギが知恵をふりしぼって生き延びるといふ昔話。立ち向かうヤギの姿を語ることで子どもたちに勇気が伝わればと願っています。

第16回特別賞 『見えない恐怖をこえて』を含む『シリーズ臨界のムラから』



## 箕川恒男氏からのメッセージ

1999年に起きた茨城県東海村の核燃料加工会社JCO（ジェー・シー・オー）臨界事故は、二度と味わいたくもない記憶として今なお鮮明ですが、2011年の「3.11東日本大震災」は、JCOと比較にならない恐怖と悪夢の歳月をもたらしました。

3分近くも長く続いた震度6弱の揺れで自宅倒壊に至らずに幸いとしても、屋根瓦は崩れ、壁に亀裂、家具も散乱してゴミ屋敷と化したばかりか、停電で上下水道、ガスも機能せず、ガソリンにも事欠く始末で暮らしは全面破綻しました。津波にこそ遭わずにすんだけれども、東電・福島第一原発の発する放射能に怯える日々が続き、まさに疲労困憊。気力も萎えて沈滞すること3年、ようやく重い腰に鞭打つぐあいで身辺復旧にとりかかる、そんな情けなさでした。

大震災から6年余。2万に届かんとする死者・行方不明者、それに震災関連死者を犠牲に供し、長期避難、故郷喪失、あげくに「いじめ」等々。原子力エネルギーなる悪魔との共存なんぞ可能なはずもないという教訓を骨の髄まで叩き込まれたのに、「懲りない面々」が原発再稼働へ一目散という卑しくもあさましき狂態に、小生は腸煮えくりかえる思いです。



第17回功労賞 『百姓は米をつくらず田をつくる』

## 前田俊彦氏長女 前田賤氏からのメッセージ

都会から田舎へ移り住む人の紹介をテレビや雑誌で知る機会が多くなりました。路線バスの運行が廃止された頃、平成の大合併が行われて公共施設が一極集中化し、町民は不自由を強いられております。そんな中人口2万人ちょっとのこの町にやってきた移住者や若者・定年退職後の人たちの試みに新しいものを感じます。

その一方では寄り合い所的な役目をしている、昔ながらの個人商店や何代も続く醤油醸造所があります。外国留学を終えた若いヴァイオリストは地域を中心にリサイタルを行い、30年間も続いている少年少女合唱団も健在です。

住いの四里四方で生活に必要な生産がなされ、文化が享受できる社会をとの願いを込めて書かれた膨大な父の著作物に私の拙文を加えまして新木安利さんが一冊にまとめてくださった『百姓は米を作らず田を作る』が第17回地方出版文化功労賞をいただきました。

あれから10余年、治安維持法により若い頃の7年間を獄中で過ごしました父はこの町のそしてこの国の今を彼の岸からどのように見ているかと思うこの頃です。



第17回次席 『聖なるルネサンス-安田侃』

## 柴橋伴夫氏からのメッセージ

### 「書きづつけております！評伝を」

彫刻家安田侃に光をあてた『聖なるルネサンス-安田侃』が第17回地方出版文化功労賞・次席を頂いたことを、とても大きなはげましとして、今も芸術家の評伝を書きつけております。特に、古いものを壊し、新しい芸術を切り開いている前衛的仕事をなしとげたアーティストに魂を込めてアプローチしております。『聖なるルネサンス-安田侃』の後も、『夢見る少年 イサム・ノグチ』、『太陽を掴んだ男 岡本太郎』、『海のアリア 中野北溟』とつづき、2014年に『生の岸边 伊福部昭の風景』を出版しました。

日本の中で、評論や評伝の仕事は、小説と比較すると、肩身の狭いゾーンにおしこめられています。私は、アーティストの「生の聲」<sup>せい こえ</sup>をしっかりと聴きとり、多くの人々に芸術家の「魂の形」を伝えてゆくことを一つの使命と課しております。さらに少しでも高い頂<sup>いただき</sup>をめざして、かきつづける決意です。なお、現在、勅使河原蒼風と勅使河原宏の二人にチャレンジしております。タイトルは『前衛のランナー』となる予定です。以上、近況まで。



第18回奨励賞 『地域と出版 南方新社の十年を巡って』

## 図書出版南方新社代表 向原祥隆氏からのメッセージ

### 「50年後の田舎の風景」

南方新社という出版社を鹿児島にUターンして創業したとき、私は36歳だった。あれから24年、馬齢を重ねて60歳になった。

本を作りながら、田んぼ仕事を始めて10年にもなるだろうか。小さな谷に8枚あった田んぼは、まず、5年ほど前に爺さんが作るのをやめた。

今年からは腰を痛めた80過ぎの婆さんが2枚作るのをやめ、一番迫の老夫婦もやめた。50代の若手のホープも昨年10月、水難事故であっけなく世を去った。こうして、8枚のうち3枚の田んぼだけが、今水が張られ、早苗が風に揺れている。

条件のいい鹿児島市内にしてこうだから、過疎・高齢化の最前線たる中山間の村は推して知れよう。すでに田畑は壊滅に近い。

何十年も、何百年も人々を養ってきた土地が荒れていく。50年後の未来もこの延長にあると思えば、還暦だからと簡単に引退するわけにはいかない。



第18回奨励賞 『高校生一万人署名活動 高校生パワーが世界を変える』

### 長崎新聞社 森永玲氏からのメッセージ

2005年の第18回で「高校生一万人署名活動 高校生パワーが世界を変える」（長崎新聞新書）に奨励賞をいただき、署名活動事務局の平野伸人氏と私のふたりで表彰式に出席しました。本がたくさん並んだ会場を拝見し、表彰式と夜の懇親会に出席し、とても楽しかった思い出として、平野氏と今も語り合うことがあります。

鳥取の心ある方たちが力を合わせ、地方の小さな出版活動を見つけ出して、激励する取り組みを30年も続けてこられたことに敬意を表します。あのときお訪ねした倉吉市で、「民間人の手で、ほそぼそではあるが今後も続けていきたい」とおっしゃっていた永井伸和様のお話に、深く感銘を受けたことを記憶しています。

核兵器の廃絶と世界平和を願い、高校生が街頭で署名を集める高校生一万人署名活動は17年目に入り、署名数は累計で約150万筆に達しています。署名簿は毎年、高校生平和大使が国連欧州本部を訪問し、自らの手で提出しています。おかげさまで高校生たちの活動が今も健在であることを皆さまに報告し、地方出版文化功労賞のますますご発展を祈念します。



第18回特別賞 『北海道仏教史の研究』

### 佐々木馨氏からのメッセージ

前回の「20周年記念メッセージ集」に近況駄文を草して早や10年。まさに、光陰矢の如し。

昨年古希を迎えた私にとって、近況報告の第一は、「所属身分の変化」です。6年前に北海道教育大学を「65歳定年退職」したのち、引き続きこの3月まで「特任教授」を5年間勤め、4月から「歴史学概論」と「日本文化史」の非常勤講師をしております。

2つめは研究近況です。平成8年に開始した「青森県史編纂事業」が来年3月をもって終了します。その間、中世史部会の正副部長として、資料編を4巻刊行することができました。北海道・函館に住みながら、「みちのく」との歴史的関連性を学びえた貴重な20年間でした。この成果を次作の「北海道開教史の研究」に是非、生かしたいと念じています。

最後に市民運動の取り組みを一言申し添えます。昭和53年に創設された「函館の歴史的風土を守る会」の5代目会長、及び3年前に、五稜郭の世界文化遺産登録を目指して発足した「五稜郭の文化価値を考える」会の初代会長として、関係者の皆さんと一緒に日々奮闘しております。



第19回功労賞 『ようこそ、フランス料理の街へ』

## 丸谷 馨氏からのメッセージ

11年前に受賞した私は、現在58歳。亡き父の五十回忌を終え、体の不自由な母（84歳）を介護しながら暮らしております。

パートですが、今年から林業に携わり、山の急斜地での作業をしています。危険をともなうため、万が一を考えエンディングノートを用意しました。そこで死後の選択をしなければなりません。これまで、先祖伝来の仏教寺院の檀家でしたが、抜けることを決意しました。無論、熟慮の末の選択でした。終活の一環としては避けて通ることができない問題に直面し、宗教や信仰を見つめなおすことになりました。

わが家には跡取りがいません。将来、墓守がいなくても安寧を得られる場所を探し求めていたところ、ある日偶然、町はずれの里山へと導かれたのです。そこは東北で一番歴史あるキリスト教団の霊園でした。この地域（青森県弘前市）はキリスト教にも所縁の深いところです。中央の墓石（主塔）には「地の塩 世の光」と刻まれています。美しさはもとより静謐な雰囲気にも心を打たれ、今夏、導かれるままキリスト教の門をくぐりました。この墓碑銘、本賞のミッションとも思えるのです。



第19回奨励賞 『夕張 風間健介写真集』ほか

## 寿郎社 代表取締役 土肥寿郎氏からのメッセー

地方出版文化功労賞（奨励賞）を初めていただいたのは2006年の第19回るとき、風間健介写真集『夕張』でだった。この写真集は日本写真協会新人賞と東京の批評家たちが選ぶ「写真の会賞」も受賞したが、風間さんは地方出版文化功労賞受賞をことのほか喜んでいました。それは著者と同じくらい、あるいはそれ以上に出版した版元への敬意が表された賞だったからだ。「最後の無頼派写真家」風間健介は細やかな心配りをする人でもあり、「ジュロウシャが認められてよかった」と素直に喜ぶ彼を見て、わたしはこの写真集を出して本当によかったと思った。そしてブックインとっとり実行委員会に感謝した。

風間健介さんは、今年6月、千葉県館山市の借家で56歳で亡くなった。皆生温泉で飲み明かした話も、もうできなくなってしまった。



第20回奨励賞 『私たち、みんな同じ 記者が見た信州の国際理解教育』

### 城島徹氏からのメッセージ

「街の本屋さん」も地方出版の未来には欠かせない存在だと思います。「頑張ってください」。その思いでこの数年間、全国取材しました。その一部ですが、紹介しますので、立ち寄ってみてください。

北から「1万円選書」で起死回生の「いわた書店」（北海道砂川市）、プレハブ店舗で再建した「伊東文具店」（岩手県陸前高田市）、雪国の「北書店」（新潟市）、信州の老舗「平林堂書店」（長野県上田市）、絵本と児童書の「たつこの書店」（同県松本市）、創意工夫の「春光堂書店」（甲府市）の奮闘ぶりが心に残ります。

関西では、こだわりの「三月書房」（京都市）、レトロビルの「メリーゴーランド京都」（同）、歴史書の「桂雲堂豊住書店」（奈良市）、専門料理書の「波屋書房」（大阪市）、作家を囲む会を重ねる「隆祥館書店」（同）も個性的でした。

さらに西へ行くと、金子みすゞゆかりの「木村聖文堂」（山口県長門市）、九州の「子どもの本屋ピピン」（佐賀市）、青空が印象的な「OMAR BOOKS」（沖縄県北中城村）が忘れられません。



第21回奨励賞 『壁のない風景 ハンセン病を生きる』

### 井上佳子氏からのメッセージ

ブックインとっとり創設30周年、おめでとうございます。息の長い、地道なご活動に心から敬意を表します。

今回ご案内をいただき、十年前に授賞式で鳥取にお邪魔したことを懐かしく思い出しております。母と小学生だった娘も同行し、せっかくだからと、大山や境港のゲゲゲロードなどにも案内していただきました。

私はテレビ番組のディレクターとして、これまでドキュメンタリー番組を制作してきましたが、同時に活字にまとめる作業もしてきました。もっと私性を表現したいとの思いからです。2008年には、番組で三池炭鉱取材し『三池炭鉱・月の記憶』を出版いたしました。今年は、私の祖父が残した日記を題材にした『祖父の日記』を出版する予定です。私の祖父は日中戦争で戦死しており中国にその足跡を辿りました。今回、戦争の時代取材、執筆して、「言葉」が時代をつくり、人びとの寛容、不寛容、幸福度まで決めてしまうことを感じています。これからも「言葉」と向き合っていきたいと思っています。



### 第23回功労賞 『鯨取り絵物語』

#### 中園成生氏からのメッセージ

平成22年（第23回）に『鯨取り絵物語』で功労賞をいただきました。長崎県北西部の平戸市生月町で「島の館」という博物館の学芸員として、生月島の特徴的な歴史・文化である捕鯨とかくれキリシタンなどの研究に取り組んでいます。

捕鯨研究は開館準備で採用される（平成5年）以前から続けてきて、日本捕鯨の概要が見えてきた頃に、弦書房さんからお話しをいただき、図を多く掲載した読みやすい本を出して貰いましたが、まさかこのような賞を、それも尊敬する中村哲先生の次の回でいただけるとは思っていませんでした。

現在は、もう一つの主要テーマであるかくれキリシタンについて纏めた本を、同じ弦書房さんから出していただく事となり、目下、際限ない校正の泥沼に喘いでいる所です。その本が出れば、誤解が多い同信仰について多くの方に実像を知っていただけたらと思いますが、それで雇って頂いた生月島への恩義を何とか返せそうです。

「ブックインとっとり」の弥栄を御祈念します。



### 第24回功労賞 『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』

#### 岩下明裕氏からのメッセージ

受賞の知らせを出版会から受けたとき、何の話？ と訊き返した。本を出して時間もたっていたし、心当たりもなかったし。出版会が知らない間に応募していたことを知る。

次に思った、その賞何？ 地方出版文化功労賞とは大げさな。文化や功労には無縁の仕事しかしていないのに、なんでまたと。

ネットで検索すると由緒ある賞だとわかってまたびっくり。担当者から連絡があり、札幌から鳥取まで招待、賞金もあるという。鳥取県には米子以外いったことがなかったから、嬉しかった。

印象に残っているのは博物館にあった、北海道利尻島への移民の写真。以前、島の仙法志地区を訪れたとき、移民の記録を見つけ、へえ鳥取から！ と記憶していた。人々の足跡が地域を越え残っている。いまは「国境」という壁で行き止まりになっている地域も、昔は壁の向こう側とつながっていた。境界に断断され、しかし紡がれてもいたつながりと営みを再現したい。

賞金はって？ たしか根室に寄附したような。



## 第24回奨励賞 『刑務所の中の中学校』

### 角谷敏夫氏からのメッセージ

#### 「思い出深い長旅の授賞式」

第30回地方出版文化功労賞授賞式おめでとうございます。

拙著「刑務所の中の中学校」の授賞式は第24回で、2011年10月22日（土）のことでした。始発の西武線に乗り池袋へ。東京駅から新幹線で姫路へ。そして「スーパーはくと」で倉吉へ。8時間余の道程でした。当日、表彰（賞状の193文字で書かれた文章にはいたく感激しました。）を受け「学ぶことで人は変わる一桐分校の記録」と題して講演をしました。その後、黄昏の街中の「KAMIあかり」展に多数の出席者と共に案内していただき、懇談会となりました。受賞の知らせに始まりこの間、ブックインとっとり事務局の小林久美子氏には大変お世話になりました。

翌日、新幹線を名古屋で下車し、高速バスで長野県飯田市に行き一泊。翌日は南信教育事務所主催の講演でした。

現在、私の講演は沖縄から北海道まで全国で120回を超えました。今年の2月には岩波書店刊の「刑事司法を考える第0巻『刑事司法への問い』」に執筆しました。また6月にはNHKテレビ「新日本風土記」に出演しました。

30回を数える由緒ある地方出版文化功労賞。この間には大変なご苦労があったことと推察します。ブックインと通りの益々のご発展を心から祈念申し上げます。



## 第25回奨励賞 『東北 ダイコン 風土誌』

### 東北大学非常勤講師佐々木寿氏からのメッセージ

#### 「受賞を契機に新たな出会いが」

ブックインとっとり創設30周年、誠におめでとうございます。地方出版文化功労賞は、全国の地方出版に携わる方々にとって最高の応援になっています。とりわけ、貴重な地方の歴史と文化や芸術、地域風土、地域資源、それらを支える人々を描いて、広く伝えるという重要な役割を担っていると思います。

幸運にも、第25回目に奨励賞をいただいた際には、東北各地で地ダイコンを継承している方々が自分のことのように喜び、何よりも、地元で活躍している素晴らしい教え子たちが祝福してくれたことで、感激ひとしおでした。

受賞後は、ライフワークに拍車がかかりました。大阪、東京、仙台、石川、岐阜、地元での研究会や、宇都宮大と東京農大等、大学の学会のシンポで地ダイコンの講演を行い、高校現職教育や文科省内でもレクチャーしました。また、4年前と昨秋に、NHK総合テレビの全国番組「うまい！」に2回出演の機会があり、全国に地ダイコンの価値と魅力を発信することができました。

これらすべて、賞をいただいた賜物であり、改めて厚く御礼申し上げますと共に、関係者各位の益々のご発展をご祈念申し上げます。



第25回奨励賞 『愛だ！上山棚田団 限界集落なんて言わせない』

協創LLP出版プロジェクト 原田明氏からのメッセージ

## 「奇跡の本」

大阪のアホな人たちが、200キロも離れた棚田の再生活動を続けている。私がそのことを知ったのは、その活動が始まって約1年たったころでした。その頃私は、33年働いた会社を早期退職して、自分自身と時代の行方を探っておりました。思えば格好の題材でした。で、とにかく始めました。経験のない未知の世界。出版に出帆しました。(笑)

「出版？そんなもんでできるわけがない。商業出版？ 自費出版？ だいたいやねえ、いくらかかると思ってるん？」経験者に突っ込まれました。返す言葉がありません。一方で反骨心が湧きあがりました。「やってやろうじゃない?!」おカネは一銭もありませんでしたが、協創してくれる仲間がいました。

岡山にも出版社があるはずと、パソコンに「岡山」「出版社」と打ち込み、「吉備人出版」を、そしてさらに、「設立15周年記念原稿募集」の文字を見たときの心の震えを今でも覚えています。

当初は「タラ話」だったものが、吉備人出版様の選考を経て実際に上梓され、さらに「ブックインとっとり」の審査員の皆様に認められ、地方出版文化奨励賞をいただけるという思いがけない展開になりました。私共にとって、まさに奇跡の本なのです。

=====

「ブックインとっとり」30周年おめでとうございます。永年のご尽力に心からの敬意と賛辞をお送りします。地方出版文化が、関係者お一人お一人の熱い思いに支えられていることを存じております。今後ますますのご発展を心よりお祈りします。

しかし、上山はエライことになつとりますぞ。「上山集楽」で検索してみてください。



第25回特別賞 『奄美沖縄 環境史資料集成』

安溪遊地氏からのメッセージ

## 「鳥取に足を向けては寝ていません」

3.11のあった月に出した、枕のように分厚い『奄美沖縄環境史資料集成』（南方新社）でブックインとっとり2012の特別賞をいただき、地方からの出版のエネルギーに触れてたいへん感激しました。

あれから、版下作成ソフトを使っての本づくりを続けています。2017年の3月に大学を定年退職するまでに12冊の編集と出版にかかりました。そのうち9冊までは、電子化してyamaguchi-ebooksというサイトに載せましたので「山口県立大学」で検索してみてください。現役最後の本は、『廃村続出の時代を生きる』と題して、鹿児島島の南方新社から出ました。

大山のふもとの海辺の村で暮らして田んぼを耕した1年間は、耕す大学教員としてのわが家の出発点になりました。退職後も、生涯現役をめざし農作業もフィールドワークもひとつのものと思って家族で農的な暮らしにいそしんでいます。そんなわけで、鳥取に足を向けては寝ていません。



第25回特別賞 『奄美沖縄 環境史資料集成』

## 当山昌直氏からのメッセージ

### 「『ブックインとっとり』への想い」

大阪に着いて、そして鳥取へ。目の前にひろがる田園風景、さらに遠方には山。窓にうつる電柱がビュンビュンと背後に飛んでいく。鉄道の旅は、沖縄に住む私にとって童謡の世界。幸運にも「ブックインとっとり2012」において地方出版文化功労賞の特別賞を受賞することになったのである。

当初はまったく実感がなかった。しかし、時間がたつにつれて、その喜びがわき上がってきた。共編著者の安溪遊地氏もかけつけての授賞式。感激であった。他の地域からも受賞者が参加していた。全国的である。

このような中、もう一つ感心したのがあった。「とっとり」である。「とっとり」が毎年「全国」を催しているのである。これにはすごいと思った。関係者に敬意を表したい。30周年おめでとうございます。私はブックインととりの賞を「地方出版のノーベル賞」と呼びたい。



第27回奨励賞 『〈ルポ〉原発はやめられる

ドイツと日本—その倫理と再生可能エネルギーへの道』

## 北海道新聞編集委員 小坂洋右氏からのメッセージ

30周年おめでとうございます。札幌の寿郎社刊『ルポ 原発はやめられる ドイツと日本—その倫理と再生可能エネルギーへの道』で第27回の奨励賞をいただきました。

倫理委員会を設置して、哲学者や宗教家も交えた議論の末に2022年の全面的な脱原発を決めたドイツの内情を伝えつつ、「では日本はどうあるべきか」を問いかけたのがこの本です。グローバルな問題提起を札幌の出版社が受け止めてくれたことにまず驚きを覚えました。提言の重要性を認めてくれたブックインととりの審査員の方々にも感謝しております。その後、未来社から『大地の哲学 アイヌ民族の精神文化に学ぶ』を出しています。

最近の日本の政治には失望することが多いですが、一歩引いたところで先行きを見据え、ものを申せるのは地方ではないかと考えております。その意味でも、地方に物書きがいて、書いたものを世に送り出してくれる出版社があるという環境は大事です。それを後方支援する地方出版文化功労賞もどうか末永く続けていただきたいと思います。



第27回奨励賞 『伊藤野枝と代準介』

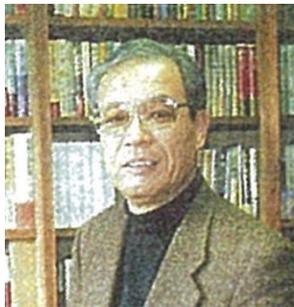
## 矢野寛治氏からのメッセージ

博多から妻と倉吉へ向かった。

鳥取も倉吉も、長い人生で一度も足を踏み入れたことがない。それだけに子供時代の遠足のように心が高揚した。岡山で新幹線を降り、スーパーいなばに乗った。途中、智頭を通る。日活の監督西河克己が出た町だ。「伊豆の踊子」の薫は私は第1作目の田中絹代の演技が好きだが、吉永の可憐さは小説の中の薫に最も似ていたと思う。鳥取で乗換え倉吉へ着く。「男はつらいよ」の第44作が撮られた町だ。43作が私の故郷大分県中津と日田で撮影されていた。両作共に吉岡秀隆と後藤久美子の若い恋である。なにかのご縁を感じた。倉吉はさすが山田洋次監督のお眼鏡に叶うだけの美しい町だった。白壁と土蔵と堀の町、妻と二人、エトランゼを楽しんだ。

夜の親睦会は知性溢れるかつ謙虚で謙譲で律儀な方々と語り、心の籠ったお料理を愉しませて頂いた。あの時の「のどぐろ」の味は今も忘れられない。賞を頂いていなければ、倉吉まで足を運ぶことは一生なかったかもしれない。

30年、おめでとうございます。この賞が弥栄に続かれんことを心よりお祈りします。ありがとうございました。



第27回特別賞 『静岡県鉄道軌道史』

## 森信勝氏からのメッセージ

栄えある伝統の「ブックインとっとり制定30周年記念」祝賀会を迎えられ、誠におめでとうございます。第27回特別賞を思いがけなく受賞することができ感慨もひとしおで、その後の執筆活動の大きな励みになっており、ここに謹んで厚く御礼申し上げます。また、刊行と出展いただいた静岡新聞社に改めて深く感謝申し上げます。

さて、首都圏・関西圏・中京圏に次ぐ一県単独での鉄道王国静岡県の鉄道軌道史の編纂は、著者にとり永年の念願でした。日本最古の人車軌道はじめ現存15、廃線35、未開業120路線に人力・馬力・蒸気・内燃・電力の多彩な動力で、沿線住民のくらしや産業文化に貢献してきています。その創業・開業・挫折・廃線・発展の歴史的経緯を文献・新聞報道・現地調査など多くの資料を駆使して渾身の力で書き上げました。

一昨年宿願の『松本清張索引辞典』B5版500頁を刊行しました。広範で精力的な作家の限界に挑んだ全軌跡を網羅したものです。70万時に5300事項・3300人を収録しています。全国から好評で、初版から3か月後には第2刷で応えています。現在、清張研究50年の集大成の研究書を執筆中で、これで著書共著含め15冊目になります。



## 第28回奨励賞 『基地で働く 軍作業員の戦後』

### 沖縄タイムス 磯野直氏からのメッセージ

「おめでとう。ブックインとっりの奨励賞に選ばれたよ」。出版部から受賞を伝えられ「やったー」とガッツポーズしたのもつかの間、「ブックインで何の賞？」と最初は正直思ってしまいました。ネットなどで検索しても、どうにも内容がよく分からない。でもせっかく表彰されるのだからと、喜び勇んで人生初の鳥取県に向かいました。

事務局の小林泉さんから「この賞は鳥取県民が選んだのですよ」と教えてもらいました。僕たち沖縄の記者は民意を無視する新基地建設の強行など、不条理な現場を日々目の当たりにしています。「こんな国のひどいやり方がどうして本土に伝わらないのか」と孤立感を味わうことが多々あります。事実はねじ曲げられ、ネット上や右翼メディアでは「沖縄は基地で食ってる」「沖縄の新聞は偏向している」と罵詈雑言の嵐です。

しかし、鳥取の人たちが僕らの本を受け止めてくれた。土地を奪われた人たちが、そこで米軍の家を建てる仕事に就く。苛烈な沖縄戦を生き抜いたのに、家族や友人を殺したかもしれない米軍の弾を磨く。基地で働いたことによって「戦争に加担してしまった」と今も自問する人たちが少なくない…。そのことを伝えようとした企画が、僕らのあずかり知らない所でしっかり伝わっていたということに本当に感動しました。

それと、このブックインの運営についてです。何でもかんでも行政に頼り、補助金をいかに出させるかに腐心するのがこの国のイベントの常ですが、それに背を向けるみなさんの「非常識」なスピリットには頭が下がる思いです。「そこを我慢することが私たちの民主主義を守ることなんですよ。普遍的な問題だと気付いたから、公的な助成金は拒否しないと」という永井伸和さんの言葉には心底驚きました。「やせ我慢」しながら30年も続けてきたブックインのスピリットを、みんなで受け継ごうともがいている。みなさん、かっこよすぎますよ。

3次会、4次会と付き合いしてくれたみなさん、僕はあの夜を忘れません。現場で孤立感を味わうことがあっても、「理解してくれる人がいるのだ。少なくとも鳥取に」という思いで踏ん張っています。いつかまた、おいしいお酒を飲みにも再会することを願っています。



## 第28回奨励賞 『古文書にみる会津藩の食文化』

### 平出美穂子氏からのメッセージ

#### 「第28回地方出版文化功労賞奨励賞を受賞して」

早いもので、一昨年(2015年)の6月下旬、ブックイン様より受賞したことをお聞き致しましたが、あまりにももの突然のことでしばらくは茫然としていましたことが思い出されます。日本中の多くの本の中からノミネートされ、またその中からわずか2作品の奨励賞の枠の中に選ばれることなど、あり得ないことでした。新聞発表後は、県内の多くの歴史家の先生からも祝辞をいただき、時が過ぎれば過ぎるほど、この賞の重みが深まっていくことを感じております。本当にありがとうございました。

昨年は『会津伝統野菜』を出版させていただきました。また、来年は会津藩主京都守護職150年祭が施行されますのでそれを記念して『会津藩と会津小笠原流礼法』を出版しようと頑張っております。こうしたエネルギーが次々にわき出てきますのも、ひとえに、受賞できたことによるものでございます。ブックインの皆様、本当にありがとうございました。



## 第28回特別賞 『日口現場史 北方領土—終わらない戦後』

### 本田良一氏からのメッセージ

30周年おめでとうございます。

2015年に特別賞をいただき、大きな励ましになりました。今も北海道が抱える北方領土問題や水産、貧困などのテーマに取り組んでいます。

国政のツケ、矛盾は地方に典型的に現れます。地方の問題を深く掘って行くと、全国の問題が見えてきます。一方で、地方の挑戦的な取り組みは、同じ問題を抱える全国のモデルにもなります。過去のツケも未来の希望も地方にあります。

「国益」という抽象的な言葉ではなく、地方で暮らし、生きている人々の視点で考えることで、問題の本質は見えてきます。

地方出版を励まし、地方に埋もれがちな良書に光りを当てる実行委員会のみなさまの活動は、今後もますます大きな意義を持ってくると思います。引き続き、地方出版、地方ジャーナリズムの応援をお願いします。



第29回功労賞 『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』

ローカルジャーナリスト 田中輝美氏からのメッセージ

「ブックインとっとり創設30周年に寄せて」

30年という長い年月。さまざまなご苦労があったかと想像しますが、開催し続けてこられたこと、本当に素晴らしく、関係者の皆さまに心の底から拍手を送りたいと思います。というより、スタンディングオベーション！です。

私は鳥取県の隣にある島根県を拠点に、フリーのローカルジャーナリストとして活動しています。共著書の『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』を、第29回地方出版文化功労賞として選んでいただきました。

私にとって、どの賞より目指していた賞であり、一緒に取り組んだ法政大学藤代裕之研究室の学生、そして、ハーベスト出版のスタッフとともに飛び上がって喜んだことを、いまでも鮮やかに憶えています。

受賞を機に、本を新しく手にとってくれた人もおり、輪の広がりを感じています。先輩受賞者からも「簡単に取れない価値ある賞だから、誇りに思え」と声をかけていただきました。何より、地域に暮らし、地域を記録・発信するという自分自身の役割、もっと言えば使命についても、より自覚と責任を持って向き合うきっかけになりました。重ねて感謝申し上げます。

その後も年に1冊のペースで、地域をフィールドにした著書を執筆し続けています。地方出版文化功労賞の名に恥じないように、しっかり精進して参りたいと思います。あらためて、ブックインとっとり創設30周年、おめでとうございます！



第2回功労賞 『道選新書シリーズ』ほか

北海道新聞社 仮屋志郎氏からのメッセージ

第2回功労賞を受けた「道新選書シリーズ」に始まり、当社ではこれまでに6銘柄が受賞の榮譽にあずかりました。そのうち4作がこの10年の間に生まれ、社内はそのたびに喜びに沸いています。

第23回（2013年）の奨励賞には『有珠山 火の山とともに』が選ばれ、担当編集者だった私は授賞式に出席しました。本の作り手を包み込むような温かなもてなしは、さらに遡ること十数年前に参加した「本の学校」シンポジウムの熱気とともに、本づくりの道を歩むうえで忘れがたい記憶として今も胸に刻まれています。

30年にわたる貴会のたゆまぬ活動は、まさにSDGs～持続可能な地域づくり～を体現し、地方で生きる作り手を勇気づけるものです。長年の功績に敬意を表すとともに、これからも読者の評価に堪える本づくりをしていきたいと思っています。